



## 石垣島で採集された八重山諸島初記録のアカナチワラスボ

杉田将太郎<sup>1</sup>・尾山大知<sup>2,3,4</sup>・山下龍之丞<sup>5</sup>

## Author &amp; Article Info

- <sup>1</sup> 麻布学園生物部 (東京)  
2021723pe@azabu-jh.net (corresponding author)
- <sup>2</sup> 東京大学教養学部 (東京)  
d-oyama@g.ecc.u-tokyo.ac.jp
- <sup>3</sup> 神奈川県立生命の星・地球博物館 (小田原市)
- <sup>4</sup> 千葉県立中央博物館 (千葉市)
- <sup>5</sup> 東京海洋大学大学院海洋科学技術研究科応用環境システム学専攻 (東京)  
ryamashita0613@gmail.com

Received 21 September 2025  
Revised 03 October 2025  
Accepted 05 October 2025  
Published 06 October 2025  
DOI 10.34583/ichthy.60.0\_11

Shotaro Sugita, Daichi Oyama and Ryunosuke Yamashita. 2025. *Taeniooides anguillar* collected from Ishigaki-jima island: first record from the Yaeyama Islands, Ryukyu Archipelago, southwestern Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 60: 11–14.

## Abstract

The eel goby, *Taeniooides anguillar* (Linnaeus, 1758) is widely distributed in the Indo-West Pacific, from India to China and Japan, and southward to Australia. In Japanese waters, it has previously been recorded only from two sites on Okinawa-jima island, Okinawa Islands, Ryukyu Archipelago, southwestern Japan. In February 2024, a single specimen (85.6 mm standard length) of *T. anguillar* was collected from a river estuary on Ishigaki-jima island, Yaeyama Islands, Ryukyu Archipelago. The present specimen represents the first record of this species in the islands. Due to the destructions of its habitat caused by human activities such as resort development and water intake, *T. anguillar* is listed as “Critically Endangered” in the “Red Data Book of Okinawa Prefecture 2017”. Therefore, clarification of the distribution and habitat status of *T. anguillar*, along with conservation of known habitats, is required.

チワラスボ属 *Taeniooides* Lacepède, 1800 は、主に汽水域から内湾かけての軟泥底に生息するハゼ目ハゼ科の一群であり、頭部および体に皮褶があること、下顎腹面にヒゲ状の皮弁があること、無鱗であること、第1および第2背鰭が連続すること、背鰭および臀鰭の最後鰭条が基部で分枝しないことなどによりハゼ科の他属から識別される (Birdsong et al., 1988; Murdy, 2011, 2018; Shibukawa and

Murdy, 2012; Ba, 2023). 本属魚類はインド-太平洋から5有効種が知られており、日本国内にはそのうち以下の4種が分布する: アカナチワラスボ *T. anguillar* (Linnaeus, 1758), コガネチワラスボ *T. gracilis* (Valenciennes, 1837), チワラスボ *T. snyderi* Jordan and Hubbs, 1925, ティーダチワラスボ *T. kentalleni* Murdy and Randall, 2002 (Murdy, 2018; 是枝・本村, 2021; 宮平・立原, 2022; 山下ほか, 2022; 上田ほか, 2022; 不破ほか, 2024). チワラスボ属は軟泥底に深く潜行して生活するため、手網をはじめとした従来の魚類採集手法での採集効率が著しく悪く、長い間分布知見の蓄積が妨げられてきた (是枝・本村, 2021; 山下ほか, 2022; 上田ほか, 2022; Koreeda et al., 2025). さらに、日本産種に適用すべき学名が長らく不確定であったことも (Kurita and Yoshino, 2012), その分布知見の蓄積を困難にしていた。しかし、近年、スナモグリ類の採集器具であるヤビーポンプを用いた効率的な採集方法が確立、普及したことに加え、分類学的研究が進展して、日本産4種に適用される学名が確定するとともに、標準和名が付されたために、各種の出現情報の蓄積が急速に進みつつある (是枝・本村, 2021; 宮平・立原, 2022; 山下ほか, 2022; 上田ほか, 2022; 是枝, 2023). 上記のような状況にもかかわらず、アカナチワラスボについては Kurita and Yoshino (2012) が沖縄島大浦湾産の7標本に基づき報告して以降、国内ではこれまでに同島の大浦湾と平良湾の2地点のみで確認されていたに過ぎず (前田, 2017; 宮平・立原, 2022), 潜在的な生息環境の人為的な破壊状況もふまえて『沖縄県レッドデータブック 2017』では絶滅危惧種 IA 類に選定されている (前田, 2017; ただし、「チワラスボ属の1種1」として).

2024年2月、第1著者は沖縄県の八重山諸島石垣島において1個体のアカナチワラスボを採集した。本事例は本種の八重山諸島からの初記録となるだけでなく、国内における3地点目の記録でもある。さらに、その生息環境に関する情報は、本種の保全にも資すると考えられることから、ここに採集状況とともに報告する。



Fig. 1. Fresh specimen of *Taenioides anguillaris* collected from Ishigaki-jima island, Yaeyama Islands, Ryukyu Archipelago, Japan (ZUMT 67592, 85.6 mm SL). Photo by D. Oyama.

## 材料と方法

採集調査は、2024年2月1日に八重山諸島石垣島の河口域において、第1著者を含む5名でヤビーポンプ（ポセイドン社製）を用いて行った。得られた個体は、2024年6月10日まで第1著者が飼育した後、10%中性ホルマリン水溶液で固定した。その後、エタノール水溶液に置換し、体各部の計数計測および同定を行った。標本の計数計測方法や各部の名称は Murdy (2018) および是枝・本村 (2021) にしたがった。標本のサイズは標準体長 (standard length: SL) で表記した。各部の計測はノギスを用いて10分の1 mm単位で行い、計測値は標準体長に対する百分率で示した。本報告で使用した標本 [ZUMT 67592, 85.6 mm SL, 琉球列島八重山諸島石垣島 (沖縄県石垣市) の河口域、

2024年2月1日, ヤビーポンプ, 杉田将太郎採集] は東京大学総合研究博物館動物部門の魚類資料 (ZUMT) として登録した。なお、本種を含む希少種の生息環境保全の観点から、本稿では採集地の詳細な位置は非公表とする (詳細な採集地点は博物館の標本台帳に記録されている)。

## 結果と考察

観察標本 (ZUMT 67592) の生鮮時写真を Fig. 1, 計数計測値を Table 1 にそれぞれ示す。本標本は、頭部および体に皮褶があること、下顎腹面にヒゲ状の皮弁があること、体は無鱗であること、第1および第2背鰭が連続すること、背鰭および臀鰭の最後鰭条が基部で分枝しないことなどが、Birdsong et al. (1988), Murdy (2011, 2018), Shibukawa

Table 1. Counts and measurements of *Taenioides anguillaris* from Ishigaki-jima and Okinawa-jima islands, Ryukyu Archipelago, Japan.

Locality Cat. No.	This study	Miyahira and Tachihara (2022)	
	Ishigaki-jima I. ZUMT 67592	Okinawa-jima I. OCF-P 10480	OCF-P 10491
Standard length (SL; mm)	85.6	118.26	77.57
Counts			
Total dorsal-fin elements	49	47	48
Total anal-fin elements	43	40	41
Pectoral-fin rays	17	17	18
Pelvic-fin rays	6	6	6
Caudal-fin rays	8 + 8	9 + 8	9 + 8
Barbel arrangement	2-2-3	2-2-2	2-3-2-2
Measurements as % of SL			
Head length	15.6	15.92	16.75
Head depth	6.8	7.54	7.00
Head width	6.9	7.48	7.35
Snout length	4.6	1.72	0.48
Upper-jaw length	5.6	5.58	4.92
Eye diameter	0.4	0.78	0.64
Body depth at pelvic-fin origin	6.9	8.10	8.28
Body depth	6.4	8.61	7.66
Body depth at anal-fin origin	7.1	7.53	6.11
Body width at pelvic-fin origin	6.5	—	—
Body width	5.4	7.48	5.99
P-A length	10.1	12.02	15.03
Pre-anal length	30.8	33.93	34.43
Pre-dorsal-fin length	23.9	22.25	23.13
Pre-anal-fin length	32.5	34.14	35.63
Pectoral-fin length	6.4	12.68	14.67
Pelvic-fin length	3.8	6.76	8.12
Caudal-fin length	11.9	13.50	16.32

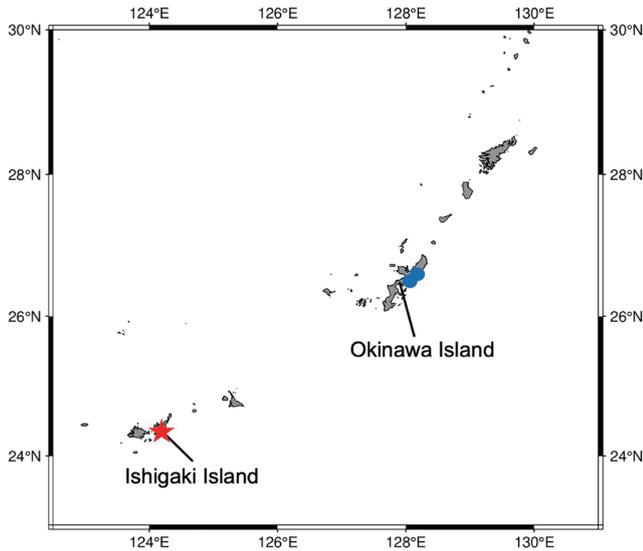


Fig. 2. Map showing distributional records of *Taeniooides anguillar* in Japan. Star and circles indicate present and previous localities, respectively.

and Murdy (2012) が定義したチワラスボ属の標徴と一致した。さらに、背鰭の総鰭条数が 49、臀鰭の総鰭条数が 43 であること、腹鰭基部後端 - 肛門距離 (10.1% SL) が頭長 (15.6% SL) より短いこと、頭部の皮褶のうち列 14 が発達し、列 9 に接すること、腹鰭が列 as3 の直下まで体と癒合することなどから、Murdy (2018)、是枝・本村 (2021)、宮平・立原 (2022) および Ba (2023) に従ってアカナチワラスボ *Taeniooides anguillar* に同定された。

なお、調査標本の下顎腹面のヒゲ状突起の配列は 2-2-3 で、Murdy (2018) が標徴とした 2-2-2 と異なったが、チワラスボ属において本形質は変異が大きく、是枝・本村 (2021) は下顎の皮弁配置について「標徴として比較的参考になるが、変異を十分に留意すべきである」と述べている。アカナチワラスボについても、宮平・立原 (2022) が記載した沖縄島産の標本で変異が報告されているため (Table 1)、本研究ではこの差異を種内変異とみなした。また、本種の頭部における皮褶の配列について、先行研究では列 17 が 2 列あると報告されている (Kurita and Yoshino, 2012; Murdy, 2018; 是枝・本村, 2021)。本研究で観察した石垣島産標本では、左側面では列 17 は 1 列のみが確認され、先行研究と異なった一方で、右側面では 2 列の列 17 が確認されたため、この差異についても種内変異の範疇であると考えられた。

アカナチワラスボはインドから中国、日本、オーストラリアにかけてのインド・西太平洋から広く知られる (Murdy, 2018)。日本国内では、これまでに沖縄諸島沖縄島の大浦湾および平良湾から記録されていた (Kurita and Yoshino, 2012; 前田, 2017; 宮平・立原, 2022)。今回、八重山諸島の石垣島より新たに記録された (Fig. 2)。

観察標本は、石垣島の河口域のマングローブ林内を流れる小河川において、干出した軟泥底の巣穴からスナモグリ類と共に採集された。干潮時の軟泥底上にはほとんど水がなく、同所からは、ニセツムギハゼ *Acentrogobius audax* Smith, 1959、セイタカスジハゼ *A. multifasciatus* (Herre, 1927)、カスミハゼ *A. janthinopterus* (Bleeker, 1853)、アサガラハゼ *Caragobius urolepis* (Bleeker, 1852)、ヒメトサカハゼ *Cristatogobius aurimaculatus* Akihito and Meguro, 2000、クロコハゼ *Drombus* sp., ハゴロモハゼ *Myersina macrostoma* Herre, 1934、マツゲハゼ *Oxyurichthys ophthalmonema* (Bleeker, 1856)、ヒゲワラスボ属の一種 *Trypauchenopsis* sp. が確認された。

上述のとおり、アカナチワラスボは日本国内において、これまでに沖縄島の 2 地点 (大浦湾と平良湾) のみで確認されていたに過ぎなかった。この要因としては、チワラスボ属における長年の分類学的混乱に加えて、軟泥底に深く潜行して生活する生態ゆえに通常の魚類採集手法による採集が困難であったために実際の生息地が見落とされていたことなどが考えられる。今回、ヤビーポンプを用いた採集調査により、八重山諸島石垣島において本種の新生息地が発見されたことを踏まえると、今後他地域でも同様の採集調査を展開すれば、新たな分布地点を発見できる可能性があり、精力的な採集調査による知見の蓄積が期待される。他方で、本種の生息環境である河口域やマングローブ域では、近年リゾート開発や取水などの人為的改変による規模の縮小が急速に進行している (神田ほか, 2009; 鈴木・森, 2016; 前田, 2017)。さらに、浮遊期の生息環境である隣接海域の環境悪化による悪影響も懸念されている (前田, 2017)。以上を踏まえれば、『沖縄県レッドデータブック 2017』において絶滅危惧 IA 類に選定される際に懸念が示されているように、本種の生息状況は人知れず急速に悪化している可能性が高い。したがって、今後本種の分布および生息状況の実態把握を迅速に進めるとともに、既知の生息地については生息環境の保全が行われることが強く望まれる。

## 謝 辞

標本の作製および登録に協力いただいた東京大学総合研究博物館の藍澤正宏氏ならびに神奈川県立生命の星・地球博物館の和田英敏博士、採集調査に同行、協力いただいた京都大学大学院理学研究科の高田喜光氏、麻布高等学校の馬淵俊輔氏、麻布学園生物部の高橋麟太郎氏ならびに永井亮羽氏、原稿に対して有意義なご意見をいただいた Ichthy 担当編集委員の畑 晴陵博士と匿名査読者に厚く御礼申し上げる。なお、本研究の一部は千葉県立中央博物館の市民研究員制度の一環として実施した。

## 引用文献

- Ba, M. 2023. Review of the subfamily Amblyopinae, with a cryptic new genus and species named *Pseudobrachyamblyopus odontamblyopsis* gen. et sp. nov. from southeastern China. *International Journal of Biology and Life Sciences*, 4: 44–54.
- Birdsong, R. S., E. O. Murdy and F. L. Pezold. 1988. A study of the vertebral column and median fin osteology in gobioid fishes with comments on gobioid relationships. *Bulletin of Marine Science*, 42: 174–214.
- 不破光大・西馬和沙・稲村 修. 2024. 富山湾から得られたチワラスボ. 魚津水族博物館年報, 33: 30–31.
- 神田 猛・上原 聡・澁野柘郎. 2009. 八重山諸島石垣島の陸水域魚類相. 宮崎大学農学部研究報告, 55: 13–24.
- 是枝伶旺. 2023. 身近な未知を解き明かす「ヤビーポンプ」. 鹿児島大学総合研究博物館 News Letter, 48: 2–5.
- 是枝伶旺・本村浩之. 2021. コガネチワラスボ(新称)とチワラスボ(ハゼ科チワラスボ属)の鹿児島県における分布状況, および両種の標徴の再評価と生態学的新知見. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 10: 75–104.
- Koreeda, R., Y. G. Seah and H. Motomura. 2025. Confirmed occurrence of the eel goby *Taenioides gracilis* (Valenciennes in Cuvier & Valenciennes, 1837) (Gobiiformes, Gobiidae) from the Kuantan River estuary, Peninsular Malaysia. *Check List*, 21: 734–743.
- Kurita, T. and T. Yoshino. 2012. Cryptic diversity of the eel goby, genus *Taenioides* (Gobiidae: Amblyopinae) in Japan. *Zoological Science*, 29: 538–545.
- 前田 健. 2017. チワラスボ属の一種 1, p. 249. 沖縄県文化環境部自然保護課(編)改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物第3版(動物編)レッドデータおきなわ. 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇.
- 宮平拓実・立原一憲. 2022. 沖縄島における *Taenioides anguillaris* アカナチワラスボ(新称)の新産地. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 16: 25–28.
- Murdy, E. O. 2011. Systematics of Amblyopinae, pp. 107–118. In Patzner, R. A., J. L. Van Tassel, M. Kovacic and B. G. Kapoor (eds.) *The biology of gobies*. Science Publisher, New Hampshire.
- Murdy, E. O. 2018. A redescription of the gobioid fish *Taenioides purpurascens* (Gobiidae: Amblyopinae) with comments on, and a key to, species in the genus. *Ichthyological Research*, doi: 10.1007/s10228-018-0635-6 (May 2018), 65: 454–461 (Nov. 2018).
- Shibukawa, K. and E. O. Murdy. 2012. A redescription of the eel goby *Trypauchenopsis* (Gobiidae: Amblyopinae) with comments on relationships. *Copeia*, 2012: 527–534.
- 鈴木寿之・森 誠一. 2016. 西表島浦内川の魚類. *魚類学雑誌*, 63: 39–43.
- 上田龍之介・佐藤大義・小林大純. 2022. 沖縄島金武湾から得られた *Taenioides kentalleni* ティーダチワラスボ(新称)の記録. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 21: 1–7.
- 山下龍之丞・尾山大知・碧木健人・鎗田めぐ・山川宇宙. 2022. 関東地方沿岸におけるヒゲワラスボおよびコガネチワラスボの記録: 2種の出現記録の増加傾向とその要因. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 20: 1–12.